

いのちと地域を守る

東日本大震災後、宮城県仙沼市教育委員会や同市中学校の校長を経て、地域と連携した学校防災に力を入れた。市内では学級管理で子どもの犠牲がなかった一方、自宅に帰った子どもが亡くなつた。県内では多数の児童が犠牲になつた学校もあり、学校だけの防災教育には限界があると痛感した。

けせんぬま震災伝承ネットワーク副会長

菅原 定志さん (63)



育成体制更新も不可欠

◀ 東日本大震災の語り部から



東無田地区

建物の80%全半壊・住民有志が復興祭



復興した東無田地区から熊本市内を臨む
=11月23日、熊本県益城町

金壇。大規模半壊7棟、半壊は15棟で、全壊した建物は地域の80%に上つた。犠牲になった住民もいる。

地区から町指定避難所は遠く、多くの住民は残った家庭の軒先や自家用車で寝泊まりする生活を送つた。公的機関からの支援が期待できなかつたため、住民は行事や消防団などで培つたつながりを生かし、民間ボランティア団体の支援を受けながら、共助で地域の復旧、復興に取り組んだ。

消防団員や有志住民が地域の復興を推進しようと16年7月に東無田復興委員会を設立し、スタディーサイアや復興祭などに取り組んでいた。委員会は23年度総務省ふるさとづくり大賞奨励賞を受賞した。

の宿泊生活を余儀なくされた。水や食事を十分取れない環境の中、狭い車内などで長時間同じ姿勢でいることによってできた血栓が、肺に詰まるエコノミークラス症候群が問題になつた。

2度目の震度7で、町内では震源となった布田川断層帯が地表に現れた。個人の家の前に現れた断層や、断層によつてずれていた被災家屋は全体の98%に上つた。被災家屋は全体の98%に上つた。

役場庁舎や町総合体育館といった公共施設にも深刻なダメージを受けた。

多くの住民は住まいを失つた上、度重なる揺れへの恐怖で屋内避難を避け、テントや自家用車で

の宿泊生活を余儀なくされた。

しまつた畑のあげ道などは、

天然記念物に指定され、地震の記憶や教訓を伝える遺構として大切に保存されている。

の宿泊生活を余儀なくされた。

しまつた畑のあげ道などは、